

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十七年十一月廿五日印刷
昭和二十七年十二月一日發行

第十八卷

第十二號

浄土

十二月號

冬

來

る

吉田絃二郎

「法然上人」を放送して

村田嘉久子

除夜の鐘によせて

大橋俊雄

佛教入門

竹中信常

1952

12

成道會

十二月八日は成道會である。人間ゴータマが悟りを開いて佛陀釋尊となられた日である。近來は四月八日の降誕會は花祭として大變盛んになつたが、意味の上からは「人間」から「佛陀」になつた成道會の方が重大である。

釋尊だつて自分で生れようと思つて生れて來たわけではなく、兩親によつて生み出されて此世に生誕されたのだから、これは普通一般の赤坊が一人生れたという丈けのことである。それなのにその誕生日が佛教徒にとつて大切なお祭り行事になつてゐるのは、このただの赤坊が三十五歳になつた十二月八日に佛になつたからである。佛様の誕生日だから四月八日が賑わうのである。つまり成道會があるからこそ降誕會に意味があるのである。

人生とはすべてこういつたものである。意味は後から加えられるものなのである。自らの人生を意義あらしめるのは、その人の人生に於ける努力以外の何ものでもない。

釋尊が成道しなかつたら、どうして二千五百年後の日本で花祭などが行われよう。眞實の意味で「成道會」こそより以上に莊重に意義深くとり行わるべきものと思う。

(竹中)

淨土 十二月號 目次

冬 來 る……………吉田絃二郎(1)

經典 阿彌陀經の話……………藤井 實應(16)

佛 教 入 門……………竹中 信常(10)

名士 佛教徒相集ふ喜び……………長井 眞琴(4)

訪問 慈父慈母同尼公……………須藤 隆仙(28)

除夜の鐘によせて……………大橋 俊雄(13)

名刹めぐり 幡隨院……………編 集 部(20)

大佛開眼のこと……………小島 章見(8)

有 難 い……………中野 剋子(26)

時 評……………(7)

ブックレ 現代文學の佛教……………折原 教詮(22)

「法然上人を放送して」……………村田嘉久子(29)

淨土ルポー伊賀……………新保 義道(25)

挿畫……………松濤達文・芝園だより



冬 來 る

吉 田 絃 二 郎

倉の白い壁に映發するかのやうにして柚子の實が、今年も亦新鮮な黄金色を枝頭高くかゞよはしてゐる。

柚子の實を見るとそゞろに冬の近づいたことを感じ、たれかれと過ぎ去つたなつかしいおもかげを思ひ出す。

いつもお十夜のころになれば八百屋の店頭に黄色な柚子の實が見られ、隅田川のかなたに寒々とした筑波が浮かんで來るのであつた。

過ぎ去つたものはすべてなつかしいといふが、過ぎ去つたものはすべて美しい。

あのころは池の端や、向島あたりはいふに及ばず、東京の何處を歩いてゐても雁の群を見たものである。柚子の實が熟れる。お十夜が來る。雁が鳴く。東京といふよ

りは江戸らしい冬の季節の感覺が、しみじみと身に迫るのであつた。

そしてそこに生きてゐる人たちも、むしろ、東京といふよりも江戸時代に育てられ、江戸時代を生きて來た人たちであつた。さういふ人たちが持つてゐた宗教的觀念といふものは、きはめて常套膚淺なものであつたかも知れないが、その信仰が身についてゐた、生活についてゐた。

近ごろの人は宗教を頭でかんがへ、頭で生きようとするが、あのころの人は宗教、お信心を身に受け容れ、生活に溶かしこんで生きてゐた。

あのころの人は口に出して宗教を云々しない。しかし

長い時代の佛教的な生活から靜かな諦觀悟道を身につけてゐた。

わたくしは親戚の一老人を思ひ出す。

老人は幕臣であつてが、幕府瓦解の折は徳川龜之助の側近として駿府に落ちて行つた。そして、すゝめられてもつひに明治政府に仕へなかつた。老人は庭を持つてゐた。庭には樹木も多かつたが、一本も花の咲く木は植ゑなかつた。

「花はながめるにはいゝが、花が咲けば未練がわくのでいけない」

といふのが老人の言葉であつた。こんな風で老人の廣い庭には一株の花の木とてもなかつた。無論老人は一本の果樹をも植ゑなかつたが、井戸のまはりに古い一本の柚子があり、それだけが秋から冬にかけて、老人の單調枯淡な庭の色彩となつてゐた。柚子は老人が植ゑたものではなく、すゐぶん時代ものであつた。

老人はいつも火災の折の注意として

「火事になつたら一物も持ち出してはいけない」と家人に語つてゐた。

老人は痛で死んだが、死ぬ日まで醫師や家人に禮を述べ、從容として大往生を遂げた。

昔はあのやうな老人もゐた。柚子の實の熟れるころになると老人のことを想ひ出す。

市村羽左衛門丈が死んだ。まだ先代羽左衛門

訪ねて行つたが、道がわからないで困つてゐると、先代羽左衛門丈が家橋を伴れて、向うからやつて來た。わたくしが人の家をさがしてゐることを話すと、羽左衛門は家橋にいゝつけて、その家まで案内させてくれた。芒に掩はれた高原の小徑を分けて家橋とわたくしは歩いて行つた。あたりには桔梗が咲き、松虫草が咲いてゐた。

二代目左團次丈とも秋風の立ち初めたころ、輕井澤の芒の小徑で逢つて、別れたことがあつた。

今はもうその三人とも世を去つてしまつた。

さびしいやうな、うらやましいやうな氣がする。

左團次は左團次らしい藝風を残して死に、羽左衛門は羽左衛門らしい藝風を遺して死んだ。家橋は未完成のまま死んだ。しかしそれでいゝのだ。そこにさびしさもあり、尊さもある。

良寛さまではないが「死ぬ時節には死ぬがよく候。時は災難をのがるゝ妙法にて候。」で死ぬることも佛の慈悲

であらう。

とはいへ、死ぬることは悲しい。大いに慟哭しなければならぬ。人間の偽らぬこゝろである。

アヒンサー博愛とは、生物を殺害しないことだけを意味するのではない。ヒンサー（残忍）とは怒りにより利己心に驅

士問
名訪

喜びふ集相徒教佛

長 井 眞 琴



本年九月二十五日から華々しく月餘の間全國各地に展開された第二回世界佛教徒大會の立役者である長井眞琴博士を今月は訪れた。

一、會議は成功した

「今度の佛教徒會議は最近我國の文化的活動の中でも特に光っております。先生の御苦勞も大變でございましたが、御感想を何か」

「そうだね、全くよかつたの一語に盡きるよ。所期の目的は果されたし、呼んだお客さんの比丘や信徒オブザーバーも感激して販つたし、佛教徒も一丸になつてやれば之だけの事ができるといふ自信もできたと思ふ。」

「その目的と言ふは？」

「そりや簡單で明瞭な事です。そもそも世界に佛教徒が數多く、又宗派も種類が多いが皆一つの佛陀釋尊から出たのではないか。それが一佛の前に額づいて同信を溫め手を握れないものだろうか。佛教では、佛教徒の事を釋尊の子と言つている、その子供同志が手を

繋ぐ機會

み出されたのは、さぞかし御骨折りでしたでせう」

「いや初めはなか／＼ね。ある學校の一室を借りて五、六人の事務員に手傳つてもらつたが、其に拂ふ金がないといふ始末だつたよ。埼玉銀行へ行つて三十萬圓程借りたが、後での話に、無擔保で之だけお借しするのは先生が始めだと言つていたよ。相談の會場は三笠會館を使つたが、借り一方だつた。しかし、やつているうちに今まで比較的冷淡だつた財界の人々が次々とこちらの信念に動かされたと云ふのか大口の寄附を申出られ、お互に勧誘さへして、おかげと会も黒字だ。

之は後日譚だが善因善果と言ふのか、その黒字の數百萬圓は皆埼玉銀行へ持つて行かせたし、彼等お客さんも三笠のレストランだけは佛教徒のやつているおいしいレストランだと覺えて飯つて行つた。ポスターを寄附した朝日生命だつて其以來急に契約額が増へたそうだ。」

「そういう風に和氣藹々と氣持よい結果に

行くと愉快ですね。」

「私の話になるが昭和九年に佛誕二千五百年式典を舉げた時も、今回のやうな苦心と喜びとを味ひましたね。何とかして、この意義ある催をしたいと文無しの信念一點張りの者がやり出したことで、どうなるかと思つたが當時全國一の金持寺と言つた三

大佛開眼のこと

—千二百年記念法要に列して—



小島 章 見

大佛開眼。其は造立された大佛像に聖靈を迎へると謂ふか、魂を入れる佛教儀式であります。同時にまた大佛によつて衆生は開眼されなければなりません。開眼とは、心眼、すなわち信眼の開顯であります。つまり大衆の一人一人が菩提心をめざまして、大慈光にかされゆくことです。佐藤賢順先生は、屢々佛教哲學における相即の論理と題されて、華嚴經に説く時間の問題をとりあげ、「永遠の今」とか、「絶対の現在に生る」ことの必要さを説かれてゐますが、奈良の東大寺の大佛開眼の意義にもつまりは、國々に、家々に、人々の心の中に、信仰といふ魂をふき込んで、先生の表現された言葉の眞理を完成することを願つたのでありませう。

今から千二百年前の奈良時代の天平十五年に、聖武天皇によつて華嚴の教主、ビルシヤナ佛の造立が發願され、天平勝寶四年四月、南天竺婆羅門僧正菩提遷那によつて、開眼供養が行はれたところの東大寺の大佛こそ、佛國土をこの地上に實現せんとし、そして蓮華藏世界をこの地上に表現せんとしたものであります。本年十月十二日より

式は最高潮に到した感がありました。

すぎし天平開眼の佛もかくやと思はれ感激ひとしほならず、しばし絢爛たる天平文化を彷彿とすることができたことはこれを拜観した私にとつて幸でした。私はそのとき大佛殿庭において諸僧によつて散華された美しい杉本健吉畫伯の木判散華の數枚をひろい、記念に持ちかへりました。今でもこの散華はまるで生きているような氣がいたします。

もとより、東大寺と淨土宗との因縁は浅からぬものがあるのです。鎌倉時代に法然上人の弟子として淨土の法を受けた俊乗房重源があります。治承四年十二月平重衡の兵火に罹り東大寺が炎上するや朝廷においては翌養和元年六月源空法然上人に東大寺再建の大勸進を内命なされましたが、法然上人は固くこれを辭して弟子の重源を推舉したのでありました。今東大寺に遺る重源の肖像を見るにつけても、その眉宇に漂ふ深い皺を、不言實行の風貌と云ひ、への字にきりつと結んだ唇や、長いほうれいの皺の線と云ひ、頬骨に漲る理智の張など全て彼の不撓不屈の性格を物語つて、彼にしてはじめてよく法然上人の推舉に答へ得た高僧であつたことを今に識ることができます。

こうした彼は壽永元年宋國鑄師、陳和卿を迎へて大佛鑄造を完了

し、文治元年八月大佛の開眼供養を齊行したのであります。(この裏には法然上人を、また重源をしたふ淨土念佛の信者の幾多の力があつたことを記憶しておく必要があります) そうして重源は自ら

佛 教 入 門

(四)



竹 中 信 常

七、新しき生活

朝、起きてから、夜、床に入つてねむるまで、私共は一日中烈しい生活の戦いを営む。口にはいえぬつらいこと、涙も出ぬほどに悲しいこと、身もふるうほどに悲しいこと、こんな日々を送っている。たゞそんな時、たゞ泣いたり怒つたり、へこたれたりしていたのでは、私共の生涯は決して楽しいものとはいえない。

たよりにする夫や愛する息子は戦争に行つて死に、家は焼かれ、財産は四散し、たつた

一人になつて焼跡に立つて、呆然と空をみつ

めたのもはや六年前。それから、一心に、

何もかもふりすてて、僅かに残つた焼トタン

を集めて假小屋を作り、焼跡をかきまわして

探し出した茶碗や鍋で、日々の炊事の煙を細

除夜の鐘によせて



大橋 俊雄

今年も師走の月が訪ずれて来た。四方の紅葉も散り布き、あたりは次第に暮色を呈して来て、年内餘日も少なになつてきたとカレンダーは教えてくれる。人間は賢いようでも愚かなもので、つねに四季を自然から教えられて知る始末である。昭和二十八年を迎へるのも残すところ日も少なになつて来た。

思えば今年ほどめまぐるしく、そしてあわただしく過した年もなかつた。そして何等なすところなくすぎて来たことを惜しむけれども所詮は後の祭りにすぎない。「後悔は先に立たず」と、古人の哲言もむべなるかな。流るゝ水の如く月日は遠慮會釋もなくすぎ去つて行くが、ともなわれないのは私達の日常が

ある。除夜の鐘を聞くのも間近い、指折り新えれば後と何日であらうか。かくて其の鐘と別れを告げれば二十八年のあらたまの年が訪ずれてくるのだが。

鐘と云えば、幼な心にも聞いた平家物語の一節「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり沙羅雙樹の花の色、盛者心衰の理を顯す、驕れるもの久しからず、唯春の夜の夢の如し、狂き者



阿彌陀經の話(六)

藤井實應

「また舍利弗、かの佛の國土には常に天樂を作す、黄金を地とせり、晝夜六時に曼荼羅華を雨らす、其の國の衆生、常に清旦を以ておのおの衣被を以つて、諸の妙華を盛りて他方十萬億の佛を供養す、即ち食時を以て還つて本國に到つて飯食し經行す。舍利弗極樂國土には是のごときの功德莊嚴を成就せり。」

また舍利弗よ。あの極樂世界では、いつも、まことに妙なる音樂がかなでられ、土地は黄金でできて金色に輝き、一日に六べんづゝ白い蓮の華が空から降つてくる。極樂の住み人たちは、いつも早朝に、たくさんの美しい華を花瓶(衣被)に盛つて、これを以て他方の十萬億の諸佛に獻げまわつて、食事の時までに本國に還つて、食事をすませて、散歩するのである。舍利弗よ。極樂國土はかように

けつこうにできている。

これは極樂は音樂や、黄金の大地、華の雨など、藝術的美の最上のものを以てその相をあらわし、また極樂の淨き住人たちが朝早くから起き出て、たくさんのそれぞれ獨自の思想信念をもたれる諸佛をおたづねして、法を聞き御供養するという

たこのよろこびをこの後どうして人に擧げ示すことができようか、
というほどの意味であります。

坐禪をやつた蘇東坡のみのことではありません。誰でも心眼を開いたならば、こゝに如來の説法を聞くことができます。説法が聞えぬというのは

呼びませる御聲はあれど聞えぬは

迷ひの眠りふかければなり

であるからです。誰でも至心に念佛申せば、如來のみ光に導かれて分に應じて心眼を開かしてもらえるのであります。

心して聞けば空吹く風さえも

甚深微妙の法のひびきぞ

と分り、更に

墨の繪に畫ける瀧の音までも

甚深微妙般若波羅蜜 (三首とも、辨榮上人)

といわれるところまでも心眼を開かして頂けるわけであります。大事なのは念佛申すことでもあります。東京驛や新宿驛の雑音騒音の只中にも、靜かに南無阿彌陀佛を稱えますと、それがそのまゝ大調和の音楽の世界となり、何と靜けき世界であることかと感ずるのは念佛者のひとしく體驗するところでもあります。

現代文學の

佛 教

(二)

折 原 教 詮



四章の二部より成つてをり、佛經・梵音の教義を巧に詠んでゐる。又同時代の桑門の詩人として池本周山（奇山）を擧げることが出来る。ローマン派の詩人ともいふべく、詩の他に短歌にも秀いでその作品は、明治四十年二月園屋書店より發行された『玉ぶち』に收載されてゐる。主なものとしては詩に「落紅」（有髮の尼君におくる）「白毫光」「廣大池のほとり」「龍女の歌」、短歌に「巨鏡」「玻璃甕」「杜鵑花」等がある。

詩の世界に眼を轉ずる時、第一に擧げなければならぬのは山崎紫紅氏の聖詩『日連』である。佐々醒雪・田中智學氏の序を載せ、明治三十六年十月金港堂より出版されたもので、上人の逸話を傳記に従つて詩化した數十篇の長詩を載せてゐる。その中特に「群衆問答」「富嶽に對して高祖を懷へる詩」等白眉といふべきである。

次に眞宗門の詩人であつたが、詩壇に交もなく、集團に屬さ

版本の奥書に「白秋、三日三夜法悦カギリナク、タダ麗ウラトシテ靈十方法界ニ遊ブ」といひ、又「我マタカクノゴトクニ心恭敬シテ詩ヲ作りタルコトナシ、頂札極マレバ詩形自ラ古キニ歸ル、タダ純一無垢ノ悲ヲ知ルノミ」といつてゐるによつて知れるごとく、集中十九篇の短詩がわづかに三晝夜で一氣に成つたものであり、その詩形は梁塵秘抄あたりの初期の今様や、和讃の形を模したものであることが窺へる。左にその中の二篇を掲げてみる。

白金ノ獨樂

感涙ナガレ 身ハ佛

獨樂ハ廻レリ、指尖ニ。

カガヤク指ハ天ヲ指シ、

極マル獨樂ハ目ニ見エズ。

圓轉、無念無想界、

白金ノ獨樂音モ澄ミワタル。

掌

光リカガヤク掌ニ

金ノ佛ゾオハスナレ。

光リカガヤク掌ニ

NKH光を掲げた人々

「法然上人」を放送して



村田 嘉久子

今年一月から二月にかけて日曜日のNHKの「光を掲げた人々」に「法然上人」が五回にわたって放送されました。二月三日は最終篇の放送でした。

御承知の知切光藏先生の御作ですが、それに就て演出の伊藤信雄

氏から、昨年の暮ごろに「来年は早々に法然上人を新年放送するのでは是非今から御願ひして置きます」と言はれて居りました。私は前にもやはり「光を掲げた人々」に慈悲に生きた蛭田本眞尼を放送しましたが、その時と同じ伊藤氏の演出でしたし、宗教方面の放送にはよく御縁がありますので、さう言はれたわけです。私は内心法然上人の御傳記にはあまり女の役はないやうに考へて居りましたが、果して第一回から四回までは一二ちよいとした女の役は出ましたが大したものではなく、折角自分の宗祖、法然上人の御傳記が放送されても、お仲間入りが出来なくて誠に残念に思つて居りました。

一方人傳に増上寺御法主椎尾大僧上が「まだ村田が出

新刊

淨土トラクト

B六、十六頁
價十圓送八圓

淨土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知っておきたい「淨土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質も、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくたいて説かれた念佛信仰者必見の書

淨土シリーズ

文庫版四頁二圓
百以上へ圓三百以上へ、五圓
送、五十部毎八圓